奈良町遺跡の発掘調査

—奈良きたまちに眠る1500年間の歴史—

平城京跡　奈良町遺跡　内侍原町・高天市町

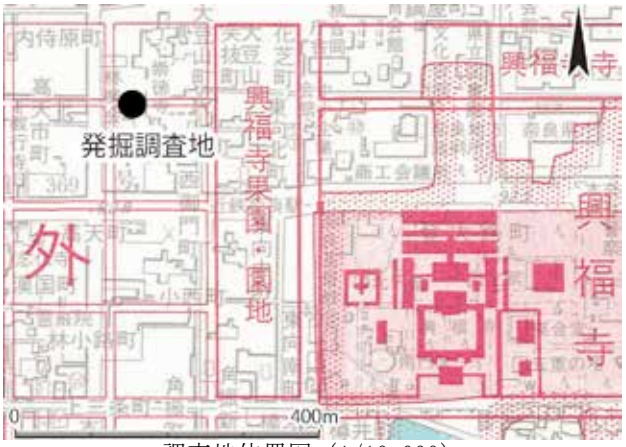
近鉄奈良駅の北側には明治期に建てられた木造洋風建築やレンガ造建築が残り、通称「きたまち」と呼ばれて、観光地となっています。その一角でおこなった発掘調査成果を紹介します。

古墳時代　５世紀中頃の古墳の周濠の一部がみつかりました。調査区が狭小なため、墳形は不明です。周濠の堆積や古墳削平後の整地土に埴輪とともに奈良時代末（８世紀後半）の遺物が混じっており、その頃に削平された古墳だとわかります。周辺には「開化天皇陵」として管理されている念仏寺山古墳や発掘調査でみつかった率川（いさがわ）古墳があり、古墳群が形成されていたと考えられています。

奈良時代　平城京左京三条六坊九坪と十坪の間にある道路の南北両側溝と十坪の宅地で井戸がみつかりました。道路の側溝は推定位置より北へ約２ｍずれて掘削されており、井戸は枠が抜き取られていました。道路側溝や井戸の下層から、奈良時代末から平安時代初め（８世紀後半から末）の土器が出土しました。平城京造営後に古墳を削平し、道路が敷設されたと考えられます。

平安から鎌倉時代　11 世紀末から 12 世紀前半の建物、11 世紀後半から 14 世紀半ばに造成された盛土や整地層、整地により造成された高低差のある区画、幾度も掘り直された区画溝、土坑がみつかりました。

11 世紀後半に北西の低い区画に土坑や溝が掘削されます。溝が埋まった後の 11 世紀末から 12 世紀前半の建物を少なくとも４棟検出しました。



調査地位置図（1/10,000）

南東の高い区画に１棟、北西の低い区画に３棟が重なってみつかり、２度の建て替えがあることがわかりました。高い区画の斜面には石積みの一部が残っていました。12 世紀半ば以降、建物が建てられていた北西の低い区画の南西部分は、５回の盛土がおこなわれ、13 世紀半ばには南東部分と同じ高さとなります。12 世紀後半には区画を南北に分ける東西溝が掘削されます。13 世紀前半には東西溝の南岸に石積みによる護岸が施されました。

中国産緑釉陶器皿

高麗青磁梅瓶

13 世紀をピークに、11 世紀後半から 14 世紀半ばの土坑や溝にはたくさんの土師器皿が廃棄されました。多量の土師器皿に混ざって、大和で生産された瓦器や羽釜、東播磨の須恵器鉢や常滑焼の甕、中国から輸入された白磁の碗や壺や青磁碗、興福寺や園城寺の軒丸瓦が出土しました。居住者の財力を示す中国産青磁香炉の破片、中国産緑釉陶器皿、高麗青磁梅瓶が出土しており、当地の居住者を考える上で重要な資料です。

14 世紀後半から 16 世紀になると遺構や出土遺物は激減し、ほとんど確認できませんでした。

江戸時代　17 世紀から 19 世紀の大量の土器や瓦を廃棄した土坑が多くみつかりました。江戸時代には室町時代末の盛土により南北の高低差はなくなり、平坦になります。しかし、17 世紀にも南北を区画する溝が掘削され、近代にも同じところに土管が敷設されています。奈良時代からの境が近代まで踏襲され、現在も内侍原町と高天市町の字境として残っています。

江戸時代の廃棄土坑には 17 世紀後半、18 世紀後半、19 世紀前半、19 世紀中頃のものがあり、多くの瓦が出土していることから、日常的なゴミというより、建物解体時の粗大ゴミを一括廃棄した土坑であると考えています。出土遺物は 17・18 世紀には肥前産の染付磁器碗、瀬戸産陶器茶碗や甕、信楽産陶器擂鉢の他、小皿、炮烙や鍋、壺、火鉢、茶道に用いられる風炉などの土師器が多く含まれていました。19 世紀前半には土師器に代わり、滋賀や京都産の陶器の土瓶や鍋、小碗が含まれます。19 世紀半ばには染付磁器が、肥前産に加え瀬戸産のものが増加します。食器や調理具のほかには、キセルやかんざし、下駄などがわずかに出土しましたが、近世都市遺跡で多く見られる化粧道具や玩具類が出土していないことも今回の調査地の特徴といえます。

近代　明治期の盛土上でも、火災に伴う廃棄土坑が掘削されており、出土遺物には海外から新しく入ってきた顔料や技術で絵付けされた染付磁器や、薬やインク、化粧品のガラス容器が多く含まれていました。

まとめ　今回の調査では新発見の古墳、調査事例の少ない奈良町付近での奈良時代の道路遺構、奈良町の変遷を示す大量の土器が見つかりました。

古墳時代と奈良時代（５世紀と８世紀）

平安時代（11 世紀後半から 12 世紀前半）

鎌倉時代（12 世紀末から 14 世紀前半）

江戸時代（17～19 世紀）